

## 大友本陣跡を守る会

— 創立十七年目を迎えて —

事務局長 沼田岩夫

別府市の石垣原史跡「大友本陣跡を守る会」は昭和六十二年秋のころ、当時、市文化財調査委員で郷土史家・安部巖先生を中心と同じく漆原辰雄、平野秀男の二氏、市議の加藤義則氏、それに不肖私（沼田）らが大友・黒田両軍の戦死者の慰霊祭をしようではないか、と話し合って結成しました。それ以降、今日まで続いています。

第一回の慰霊祭を執り行ったのは、本陣跡の地（南立石本町）に「慰霊碑」が建立されたのを記念し、翌昭和六十三年（一九八八）十一月二日のことでありました。その時の祭典の内容を新聞（「今日新聞」）記事から偲んでみることにしましょう（原文のまま）。

### 大友本陣跡を守る会

郷土史家やゆかりの人が集う

史跡「大友本陣跡を守る会」の結成準備を兼ねた関係者の集いが、このほど本陣跡記念碑前で行われた。参加者は郷土

史に深い関心を寄せる人や大友氏ゆかりの人、それに地元有志三十数人。

まず、慶長五年の石垣原合戦で主家大友家のために徳川方と戦い刀折れ矢尽きて討死した吉弘統幸、宗像掃部などの勇将三百余人の御霊に黙とう、慰霊の奏

上文を地元沼田岩夫さん（扇山町三組の一）が代読した。このあと南立石天満神社拝殿に会場を移し、市文化財調査員の安部巖氏と郷土史家漆原辰雄氏から石垣原合戦についての講話と本陣跡を守る会結成についての話があった。つづいて天満社祭神に音曲を奉納した。

まず亀川四の湯町、衛藤サダ子さんが振り付けをした「大友本陣の歌」を自ら舞った。次に沼田岩夫氏が浪曲「大友本陣」と西郷隆盛の「城山」を吟じ、南石垣、佐藤住人さんが剣舞を演じ、主家のために散っていった大友重臣たちの思い



本陣跡に集まった関係者

をしのんだ。

今後は安部巖、漆原辰雄、平野秀雄の三氏を相談役として  
守る会を育て、合戦の日に記念行事をすることなど決めた。

なお、事務局は沼田岩夫氏が担当する。

当初の会代表は郷土史家の漆原さん（註 当時は市役所勤  
務、故人）でした。第二回は昭和六十四年一月に昭和天皇が  
崩御なされ改元されたため「平成元年」の十月十四日です。

大分合同新聞でも報道されましたので、大友一族ゆかりの人  
たち五十人余りが参加して下さり、盛大になりました。  
平成三年の秋がちょうど吉弘統幸が戦死して「三百九十年  
（祭）」に当たりますので、不肖私が作詩・作曲をした（吉弘  
統幸の歌）を公の霊前に捧げることになりました。  
稚拙な内容ですが、ご笑覧下さり、ご教示を頂けたらと思  
います。

# 納



# 奉

## 吉弘統幸公御霊前

吉弘公三百九十年祭に作る

石垣原合戦

### 「吉弘統幸の歌」

作詞・作曲 沼田岩夫

編曲 三浦丈二

監修 漆原辰雄

三、風蕭々と 旗も哭く  
石垣原に 我も また  
大友最後の決戦に  
主家と共に 茲に死す  
あ、武門の道に悔はなし

一、杏葉の旗 なびかせて  
親子五代が 大友の  
危急の戦の 矢表に  
死をもて宗家 護りたる  
あ、吉弘の血の流れ

四、敵は三千 味方は九百  
死ぬを覚悟の 勇兵を  
率いる将は 人ぞ知る  
豊後の鬼神 吉弘が  
いざこの戦 目にも見よ

二、多々良ヶ浜には玄祖父が  
勢場ヶ原には曾祖父が  
耳川辺りには 祖父が死に  
高城戦には 父も逝く  
あ、先祖の遺訓肝にあり

五、猛襲七度 敵崩し  
深手を受けて これまでと  
自害をなして 原に散る  
敵将あつく 弔いて  
武士の鑑と 死を悼む

(完)

今年(平成十五年)十月二十六日(日)に第十七回目の「大友本陣まつり」を実施致しました。約八十名の方々が参加下さり、遠く東京から参列して下さいました吉弘公の末裔、吉弘尚正さんを始め、福岡・熊本・久留米からも吉弘家ご一統の方々が参列して下さいました。

本陣まつりの報道が新聞でされましたので詳細は略させて頂きます。年々アトラクションの参加が増加して地区住民や老人会、婦人会の人たちも悦んで頂きました。四百年の昔、戦死なさった英霊も地下で慰められたことと思います。

戦死者とご縁のある子孫の御芳名と御住所の「一覧表」を掲げてここに深謝致します(次頁)。

※ ※ ※ ※ ※

編集部(大野) 今年秋の「大友本陣跡を守る会」の祭典も無事に終了、事務局を勤めた沼田さん、ご苦労さまでした。

あなたの方の会も、当別府史談会と奇しくも同じ十七回を迎えたそうですね。ところで、このような慰霊祭を執り行なうようになった由来から話して下さいませんか。

沼田 実は、こんな動機があったのです。

この立石堀田(本町)で永らく大庄屋をしておられた古屋家、その先代の(故)勝馬さんが昭和六十二年九月のと、夜な夜な不思議な夢を見つづけた。

それは朱に染まった鎧武者が夢枕に立って、何かを訴え



沼田さん

るような仕草だったというのです。実は古屋さんの屋敷は四百年の昔、石垣原合戦の折に大友家二十二代、義統の本陣のおかれた地であつた。そうしたことから、ここには貴重な

「古屋文書」が数多く遺されていたのです。この古文書によると、合戦の戦死者は大友・黒田(松井)両軍併せて六〇六名で、その姓名が列記されています。先の話に戻りますと、これらみ仏(靈魂)が供養して貰いたいというのではないかと察した古屋さんから、当時、文化財委員をなさっていた安部巖先生と私(沼田)に相談があつたのです。

早速、三人が発起人となり、さらに郷土史家若干名も加わり、第一回の慰霊祭を開催した次第です(冒頭の「今日新聞」記事参照)。その前年十二月に市文化財に登録され、写真に見られるように本陣跡に、アフリカから輸入したという御影石で「記念碑」と「供養塔」が建立された。

その経費、総額二五〇万円は、すべて古屋勝馬さんの義援金です。

石垣原合戦、大友方戦死者で  
「大友本陣まつり」に参加される人のお名前とそこご先祖のお名前

平成十五年十月二十六日

| 御先祖のお名前         | 御子孫のお名前と住所             | 御名前   |
|-----------------|------------------------|-------|
| 一 吉弘嘉兵衛尉統幸      | 東京都世田谷区新町二―二八―二八―二―三〇二 | 吉弘尚正  |
| 二 永富与工門公九郎      | 福岡市博多区駅南五丁目一〇―一三       | 吉弘義鑑  |
| 三 雄城(おぎ)但馬之守    | 熊本市東野二丁目               | 吉弘忠幸  |
| 四 小出信濃守正家、通文    | 久留米市大石町二―一―一           | 永富忠   |
| 五 小出要人通文        | 別府市北的ヶ浜三ノ八             | 小野正己  |
| 六 矢野統親          | 大分郡野津原町字竹矢二―三―一        | 小野正己  |
| 七 室理清左工門        | 大分群野津原大字野津原一七四五        | 小出鎮公  |
| 八 佐藤忠工門ノ尉範久     | 大分郡狭間町医大ヶ丘三丁目二―一―一     | 手島政和  |
| 九 佐藤秀太郎忠直       | 大分郡野津原町竹ノ内四六八          | 小出隆   |
| 十 佐藤左近太夫兼高      | 別府市鶴見町八組ノ五             | 矢野春海  |
| 十一 山下勘解由(かげゆ)入道 | 東国東郡武蔵町大字吉弘五七二―一―一     | 室利則   |
| 十二 工藤 統久        | 宇佐市貴船町一―五              | 佐藤博義  |
| 十三 竹田津志摩守一本     | 福岡市南区野間三丁目七―三―一        | 佐藤弘治  |
| 十四 沼田左馬介基文      | 大分郡野津原町大字野津原一七五四―六     | 佐藤竜馬  |
|                 | 別府市北浜一―一〇―一四           | 山下行一  |
|                 | 別府市南莊園町二三組             | 工藤 勇  |
|                 | 香川県坂出市旭町一丁目一―二九        | 小暮 洗  |
|                 | 別府市扇山町三組の一             | 沼田 岩  |
|                 | 東京都港区南青山六―一―三二         | 沼田 真清 |
|                 | 別府市北中町六組               | 沼田 一人 |
|                 | 大分市中ノ瀬団地一A―三―七二        | 麻生 憲一 |

十五 長田左京之助 討死  
 十六 利光 彈正 討死  
 十七 清原 兼忠 討死  
 十八 岐部山城ノ守玄喙 討死  
 十九 江本勇三郎討死  
 二〇 森尾勇作  
 二一 大久保藏人祐  
 二二 首藤右近介秀宗  
 二三 江口掃部介重康  
 二四 立川衛門太夫清臣 (六所管被管)  
 二五 首藤貞左工門統高  
 二六 大久保小太郎  
 二七 小野伊賀守  
 二八 土屋利平衛  
 二九 惠藤又右衛門鑑房  
 三〇 宗像掃部鎮次

狭間町大字北方一九五―二  
 大分郡野津原廻栖野二〇八八  
 日出町大字大神一七六八 (別大教授)  
 東国東郡武藏大字吉弘一九三三  
 国見町岐部二〇一九  
 香々地町大字香々地三四一六―三  
 福岡県柏屋郡宇美町大字宇美  
 直入郡久住町大字栢木  
 別府市南立石本町三組  
 別府市馬場町一組の二  
 大分郡野津原町新町  
 大分市大字光吉三一―一  
 別府市山ノ口五組  
 大分市宗方一二六四ノ一  
 庄内町野畑二四三五  
 別府市緑ヶ丘七組  
 大野郡十時九〇四

長田勝己  
 利光清二  
 利光正文  
 清原京一  
 岐部増喜  
 江本元彦  
 森尾勇  
 大久保寄夫  
 首藤盛美  
 江口信幸  
 立川正行  
 首藤正登  
 伊東武  
 小野光代  
 土屋正之右  
 川野惣平  
 宗像修

御先祖のお名前

御子孫のお名前と住所

御名前

◎ 大友六代貞宗の弟師季 (勢家)  
 ◎ 戸次 鑑連 (鎧ヶ岳城主)  
 ◎ 宇土弥左工門晴貞  
 ◎ 大友岡城々主志賀親次  
 ◎ 大友義長苗裔  
 ◎ 大友氏末裔宇都宮左近太夫

大阪府高槻市南平台一―六―二〇  
 大野郡犬飼町下津尾三七〇九―八  
 中津市上宮永二―一八二  
 別府市馬場一組  
 東国東郡安岐町塩屋二〇六四  
 大分市大字丹生八二九

勢家康司  
 立花義章  
 兔洞義孝  
 志賀泰輔  
 久保啓  
 岡村シノ

大野 なんとも奇特きせきな方ですね。なかなか真似まねのできることはありません。

さて、先の大戦での戦没者のことですが、軍人・軍属それに民間人を併せると、実に三一〇万人（公称）といわれています。大分県の総人口が一二二・三万とのことですから、大変な数です。もつとも大陸の中国や、かつてのソ連邦諸国のそれは一千万人とも二千万人ともいわれています。が。

日本歴史上、日本で一番長かった日（かつてNHKで史実に基づき放映された「戦争ドラマ」の題名）、そして国民挙げて茫然自失、号泣した日といえ、それは何といつても昭和二十年八月十五日でしょう。

この終戦の戦没者慰霊祭とあなた方の「本陣まつり」も、時代こそ異なれ、ともに戦争で生命を落とした方々の供養であり慰霊です。古来、人間は「理性の動物」と称されながら、悲しい「戦争」を何時まで繰り返せば気がすむのでしょうかね。

沼田さん、あなたも戦争で苦勞したとお聞きしましたが…。  
沼田 ええ、たいへん苦勞しました。あまり語りたくも、思  
い出したくもありません。

私は当年八三歳。歳をいえば、判っていたただけるのでは  
ありませんか。

ところで私もまた、石垣原合戦では誰よりも吉弘嘉兵衛  
統幸を挙げねばなりません。それは先の大戦で散華さんげした若  
き特攻隊員の人間像とオーバー・ラップするのです。

大野 その気持ちは、私にもよく判ります。

軍隊生活を経験した者なら、誰でも忘れられない事の一  
つは「精神教育」なるものであり、朝に夕に「軍人勅諭」  
（それに戦陣訓）によつて軍人魂を注入されたことではな  
かつたでしょうか。

五カ条の徳目の順序は忘れましたが、その文言も確か

- 一、軍人は忠節を尽すを本分とすへし
- 一、軍人は礼儀を正しくすへし
- 一、軍人は武勇を尚ふへし
- 一、軍人は信義を重んずへし
- 一、軍人は質素を旨とすへし

だったですかね…。

先の吉弘公の時代は戦国時代（応仁の乱から織田信長が  
天下を統一するまで。一四七七―一五七三）であり、その  
精神的イデオロギが即「武士道」で、その究極昇華しやうげの神髓とい  
うべきものが「武士道とは死ぬことと見つけたり」の葉隠はかくれ  
精神（元佐賀藩の「鍋島論語」）であった、と私は考えて  
います。

吉弘公は戦国時代にあつて、主君大友家への忠節、信

義、武勇の点で「もののふ（武士）の鑑」であつたといふべきでしょう。

沼田 私も全く同感です。

現代社会はあまりにも乱れ切つており、吉弘公のごとき崇高な理念の持主は数少なくなつた。欲、とくに金銭欲、性欲、名誉欲、財産欲など、欲望に際限なし…。

現在社会は極端に自己中心、家族優先で他人や社会のことを考えない我利我利亡者もうじやが多い。戦前があまりにも精神主義で、犠牲的奉仕の精神を強要されたための反動ではないでしょうか。「自由」も、好きなことを他（社会）を顧みず勝手なことをすることと考へている…。

大野 憂うつなことばかり。話を交えましょう。

沼田さん、お世辞でなく、あなたが文芸の才に恵まれているのは驚きました。吉弘公讃歌を作詞・作曲するなど、なかなか出来ることではありません。お借りしたカセット・テープを流しながら、声のよいことと浪曲の名調子にも恐れ入りました。

何十年となくボランティア精神であちこちの老人ホームや社会福祉施設を口演して回り、芸道に打ち込んだ賜物でしょうね。ところで「浪曲」とは、どんな縁で…。

沼田 実は祖父が浪曲狂といわれるほどの愛好家で…。私が幼児のころ、膝に抱かれて子守歌のように聴いて育ちまし

た。あちこちの地区から声がかかると夜遅くまでやつていたそうです。そうした血が私にも流れているのかもしれない。

少し大きくなると、今度は郷土の歴史や伝説・民話になり、関心を持つようになった。

大野 今年夏の盆前、八月一日付きで群馬県沼田市からのあなたの封書、これにも驚きました。

中を開けてみて、なんと『上毛新聞』（本社前橋市）の切り抜き…。見出しに「浪曲師の沼田さん、老人施設を巡業」とある。内容は、主に九州や四国を回り、二八年間の慰問回数は「今回の利根沼田地区の四ヶ所で八六八回になる」とのこと、驚きの連続でした。

沼田 ええ、私の家祖は沼田平八郎といつて、実は群馬県沼田市の出なんです。

沼田市は城下町で、近世（徳川期）は藩主が土岐氏。戦国時代以前は、土地の豪族、沼田氏が支配していたのですが、信濃国上田城主の真田昌幸まさゆき（大坂冬と夏の陣で徳川軍を悩まし討死した智将、幸村の父）に亡ぼされ、沼田一族は諸国に散り、祖先は四国大洲に移つたようです。

祖父母のとき明治になって別府は鶴見郷にやつて来たと聞いています。

大野 先掲の『上毛新聞』で、浪曲の題目は「人類の父、野

口英世少年時代」と歌謡浪曲「名月赤城山」を披露したとあります。

施設の老人たちは、涙を流して喜んでいたとも。平成元年六月には「ハワイ」でも巡業したんですか。これにも驚きました。ボランティア精神で全国巡業、口でいろいろ言ってみても、実行することは難しい。「言うは易く、行なうは難し」です。

沼田　ところで一度、会長に教えて欲しかったのは、先の「戦陣訓」は東条英機陸相の名で出された（昭和十六年）のは知っています。「軍人勅諭」の方は、草案を書いたのは一体、誰ですか。

大野　あれは確か、明治の元勳、山県有朋やまがたありともだったでしょう。明治十五年一月四日、明治天皇から陸海軍人に下賜され、旧軍人の精神的基礎になった。その中で「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」の一言があり、これで軍人（とりわけ将校）が奮起一番、天皇と国家に生命を捧げることになったのである。

山県有朋―長州藩士で松下村塾しゅうかに学ぶ。明治初年「徴兵令」を制定。日清戦争で第一軍司令官、日露戦争では参謀総長、のち陸軍大将、元帥へ。枢密院議長・公爵で「位人臣くらひじんを極めた軍人」であり、長州閥で政界にも絶大な権力を振るった。

沼田さん、どうか九十歳といわず、百歳を目ざしてがんばって下さい。神仏のご加護で「千回達成」を念じています。正月まであと一ヶ月、風邪をひかないで下さい。本日はありがとうございます。よいお正月をお迎え下さい。

（平成十五年十二月六日記）



月夜野町の「やまぶきの苑」で浪曲を披露する沼田さん